

# Music

あの夏、彼女と観たテキサスでのライブ

Text: George Cockle  
文/ジョージ・カックル



最近、フェイスブックを通じて昔の友人との仲が復活してきた。俺みたいにインターナショナルスクールを転々として、世界各国に友達が散らばっている場合は、特に活躍する。フェイスブックで俺を見つけて、何十年ぶりに連絡をくれる。近況を知るのも楽しいが、写真を見てその変わりぶりを見るのも一興だ。そんななか、まったく連絡がなくて、逆に気になりだした人がいる。実は中学生の頃につきあっていた彼女だ！

ちょっと回りくどくなってしまったが、今回はその彼女と久しぶりに会った1975年の夏、彼女と観たバンドの話だ。

当時20歳ぐらいの俺は、世界一周旅行の終盤、アメリカの横断途中にテキサス州に寄り道をした。韓国に住んでいた中学時代の彼女がそこにいたので会いに行ったんだ。南にあるサン・アントニオというスペイン風の景色が広がるきれいな街にね。そして、久しぶりに会った彼女は「ロギンス・アンド・メシナ」のライブに連れていってくれた。メンバーはジム・メシナとケニー・ロギンスのふたり。彼らの音楽はカントリーテイストをうまくポップロックに入れ込んだ、きれいなメロディーを得意としていた。

話は戻るが、彼女のお父さんはアメリカ陸軍の司令官。大きな米軍キャンプのなか

の高級住宅街に住んでいて、すごく保守的な堅い人だった。中学時代、俺は彼女を初めてフォーマルなダンスパーティーに連れて行くために家まで迎えに行った時、お父さんに初めて会った。家まで行ってドアをノックして待っている間、すごく不安で仕方なかった。だって彼は司令官。そのとき俺の髪の毛はまだ肩ぐらいしかなかったけど、軍人はロン毛が嫌いなのはわかっていたからね。彼がドアを開けて初めて俺に言った言葉は「オイ、頭に乗っているのは何だ?」。俺のロン毛のことだ。ビビったよ。娘と一緒にいかせてくれないのかと思った。でも表情を変えないで「カムイン!」と言った。家に入って彼女が来るのを待っていた。その時はなぜ待たせるのかと思ったが、今となっては女の人はいつも男を待たせるものだとか知っている。やっとな彼女が現れたときは素直に、きれいだと思った。それまではカジュアルなジーパン姿しか見たことなかったけど、その夜はパーティードレスを着て髪をアップにし、ビューティフルだった。俺は手が震えながら大事に持ってきた蘭のコサージュを箱から出し、ピンで胸につけた。どうしていいかわからなくなっていたら、そばで座っていたお父さんが「レッツ・ゴー!」と言って俺達をダンスパーティーまで連れて

行ってくれたんだ。もちろん車の中は沈黙だったよ。

そんな思い出のある彼女と、何年かぶりに再会して、その頃流行っていた「ロギンス・アンド・メシナ」のライブへ行っただ。それは俺にとって初めての本当のアメリカのコンサートだと言ってもいいだろう。テキサスの若者は賑やかだ。お酒も18歳から飲める州なので、皆ノリノリだった。どの曲でも全員一緒に歌っていた。ほとんどの曲はデビューアルバムに入っていた曲だった。その夜は彼女の実家に泊めてもらった。そしてまた彼女のお父さんにも会った。その時も俺に初めて言った言葉は、中学のときとまるで同じだった。「おい、頭に乗っているのは何だ?」。俺はもう大人だったけど、あの時と同じくらいビビったよ。アメリカ軍の司令官になる人はやっぱり貫禄があるんだな。でもこの時の彼の目はキラキラしていて、何か優しさがあった。もしかしたら、中学校の時の俺には見えなかっただけなのかもしれないけど。



ジョージ・カックル ● 60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。  
www.whatsupmusicinc.com